

閑人閑語：地学こぼれ話(7)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 賢之輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025800

閑人閑語

— 地学こぼれ話(7) —

小夜の中山「夜泣き石」異聞

小川賢之輔

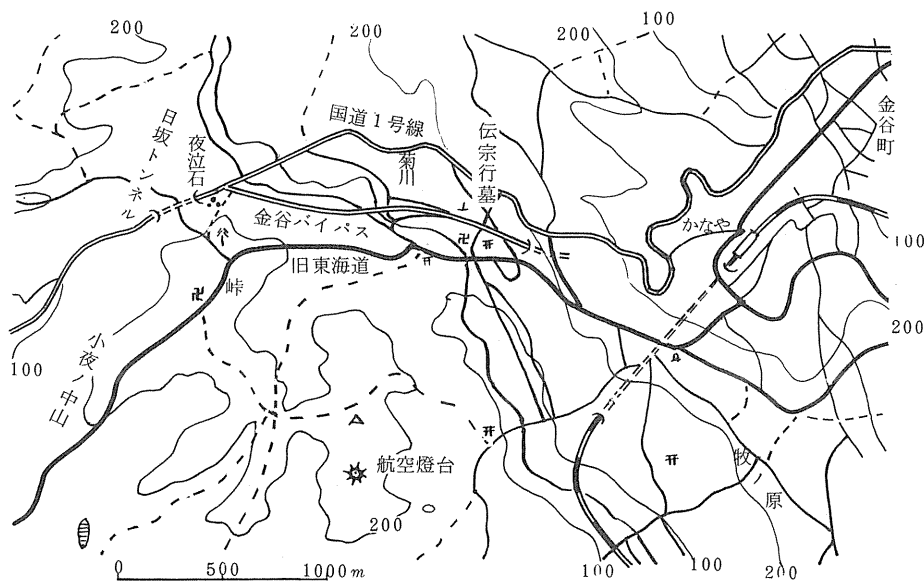
奇石(珍石)収集異聞 —鑑石第2話

秩父の亀甲石^{きつこうせき} 本誌17号に鑑石の話をのせたことがある。さて、秩父盆地の調査で、その当時、小^お鹿野町を流れる赤平川のかわらを歩くと、いわゆる秩父亀甲石に毎日、何個かおめにかかった。この秩父亀甲石こそ、脇水鉄五郎(明治40年~1907~地質学雑誌, 226巻)の、「秩父亀甲石」の兄弟分であり、コンクリーションの一種である、(石灰質)亀甲石^{ノジュール}団塊である。多くは、形が扁平で、形成時の乾縮により、亀甲状の、乾裂に似たひびが入り、この割れ目を方解石などで埋めているので、いかにも亀の化石のような擬態を示す。いわゆるシンエレンスまたは、収縮割れ目構造ともよばれる。

あんまり見事な形の亀甲石があったので、宿へ持ち帰って、さっそく主人の田嶋保氏にみせたところやれ、これが頭で、これがしっぽでと、長径約25cmの団塊に、惜しみなく重ぜんを流していた。

この亀甲石は、標本といっしょに、科学博物館の研究室あてに送ったが、その後どうなったか今は全くおぼえていない。こんなことたら、寿旅館の主人に進呈しておいたら、どんなにか感謝されたことだろうと、残念におもっている。

佐夜の中山「夜泣き石」 大井川の西岸、東海道は金谷と掛川との中間を流れる菊川に近く、佐夜の中山は位置する。(古くは、小夜の中山)。



ここに行くのには、バスを利用して「夜泣き石前」で下車するのが一番よいが、金谷駅から旧東海道散歩としゃれて、牧ノ原礫層を見学しながら、3,400m(約1時間)の横断コースをとるというのも一興というところ。(静岡県地学会資料第3号, 土隆一著: 牧ノ台地とその生いたち

* 静岡県地学会副会長

金谷駅を出ると、西方約 100 m の路傍の崖に、掛川層の青灰色シルト層が観察される。この岩相は、富士川層群万沢累層（中新世中期）の町屋互層の泥岩によく似ており、風化による細かなクラックによって、ザラザラ崩れやすい。

国鉄金谷トンネルの上を通り抜け、2つ目の分岐点を右に曲り、比高約 100 m の、牧ノ原礫層段丘面をめざして、旧東海道の急坂を約 500 m 登る。植物に興味を持つ人は、黄白色の花をつけたイカリ草の群落に目をみはることであろう。坂の終りに近く、切り通しに、人頭大以下の、分級きわめて不良の、黄褐色円礫よりなる、牧の原礫層をみることができる。坂を登りつめると、道は相良往還に達する。ここには、明治天皇駐輦碑があり、約 500 m 北に進んで、再び、牧ノ原面より菊川の谷に向かって、約 650 m の旧東海道を下る。ここでも、所々に牧ノ原礫層が露出し、一箇所に、恐らく断層による泉の湧出するのを見る。

菊川の部落に入って、菊川の橋を渡ると間もなく、藤原宗行の史跡記念碑があり、更に進んで旧東海道とわかれ、菊川橋を渡って、金谷バイパスのインターチェンジを登りつめると、傍に墓がある。この付近にも、牧ノ原礫層が露出する。

余談にわたるが、宗行の墓碑には、承久の変に連座した宗行は、鎌倉に護送の途中、菊川の宿の柱に、「昔南陽県菊水 汲下流而延齡 今東海道菊川 宿西岸而失命」の詩を残し、数日後斬られたと記してある。殺された場所は示していないが、ここに墓があるので、暗にこの宿で斬られた印象を受ける。しかしながら、宗行は、駿河郡藍沢で斬られている。太平記では、漢詩は、承中の変で捕えられた藤原光親が、この地で斬られたときの作としているが、光親は、駿東郡籠坂峠の中腹で斬られ、そこに墓がある。南朝の忠臣藤原俊基も元弘の変に捕えられ、鎌倉護送の途中、この地の宿の柱に、「古もかかるためしを菊川の おなじ流に身をや沈めん」の和歌を残し、後に鎌倉の葛岡で斬られた。

宗行の墓の所在を、部落の入にたずねたが、なかなかわからなかった。それほど、この文化史跡は、人々から忘却されつつあるようである。

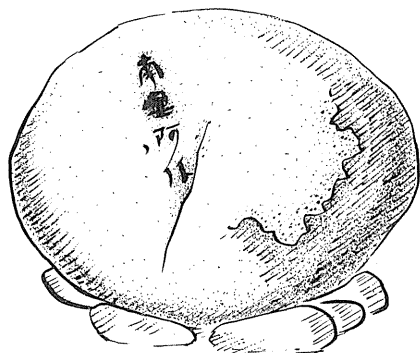
「佐夜の中山夜泣き石」は、宗行卿の墓から約 1,500 m 西方の、国道 1 号線と、金谷バイパスの分岐点に接した、南側にある。そこには、名物「子育て飴」を売る茶店が二軒あって、付近の崖には、金谷駅付近の砂岩に酷似した、青灰色砂岩（走向 N 30°E、傾斜 30°W、泥岩のごく薄い層をまれにはさむ、偽層理を示す砂岩で、粗粒部や有孔虫を含む部分がある）が露出する。夜泣き石を祀ってあるのは、その 10 数 m の台上の、小広場である。

「佐夜の中山夜泣き石」と銘をうって、長径 110 cm、短径 100 cm・高さ 80 cm の砂岩質の、やや偏平状の岩魂が、広場のほぼ中央に、雨除けの小屋根をかけて祀ってある。また、その向かって右側に接して、直径 65 cm・高さ 50 cm の、石灰質砂岩の団魂がおかれている。

「夜泣き石」に相對して、広場の南側にお堂があり、その向かって右側に、「菊石」と標札をかがけて、直径 1 m・高さ約 30 cm の、石灰質砂岩の団魂がおかれている。

広場の一隅に大形の標札があり、夜泣き石にまつわる、伝説のひとくさりが述べられている。すなわち、「昔、夕暮せまった中山の道を、みごもった若い女が、家路をいそぎながら峠にさしかかっていた。そのとき、女は賊におそわれ殺されたが、死ぬまぎわに赤子を生み落し、かたわらの岩魂にかじりついて

助けを求めながら息絶えた。峠に近い久延寺の住職が、ひん死の赤子に代って泣きさけぶ石の声を聞き、急いでかけつけて赤子を助け、^{あめ}飴で育てた」というようなことである。かたわらの岩魂のクラックは、そのとき賊の切りつけた、刀傷のあとと伝えている。



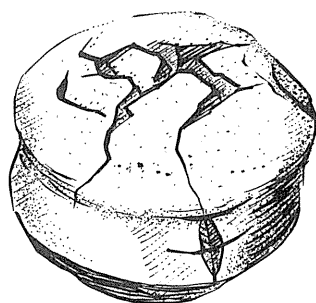
夜泣石

「夜泣き石」とよばれるこの岩魂は、大型の団魂で、(団魂の大きなものは、直径2-3mに達する)、案外、中心部に、貝化石が核としておさまっていて、苦笑をつづけているのかもしれない。

かたわらの、賊の切りつけた、刀傷のある岩魂というのは、石灰質砂岩の団魂の中心部が、乾縮などにより、クラックを生じたもので、円心円状と放射状の、2方向の標式的なクラックが観察される。

また、「菊石」と銘をうった岩魂も、乾縮による上述のクラックが、標式的な発達をとげたものであって、団魂は、中央部で、地層の堆積面、すなわち層理面に平行に、真二つに割れたものの片側で、周囲は風化を多少受けて、丸味を帯びている。

なお、付近には、ほかにも、いくつかの団魂が集められており「夜泣き石」の向かって右側には、亀甲石も放置されたままになっている。



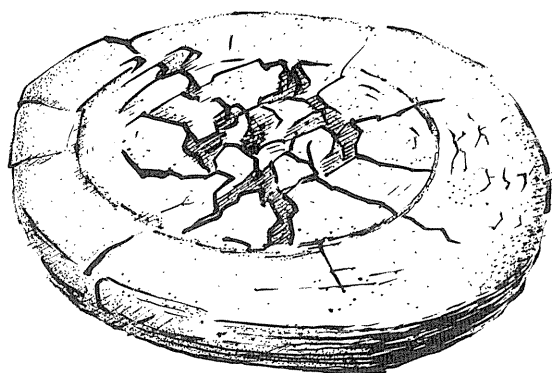
賊の切りつけた刀傷

「夜泣き石」は、広重の東海道五十三次の版画にもあるように、元は、旧東海道の、峠の東約100mの、道路の中央にあったが、故あって、ここに移されたまま現在におよんでいる。

〇〇少将のコレクション 鑑石については、奇談・珍談もなかなか多い。もともと河原^{かわら}にころがっていて、だれにも顧みられなかった石ころが、ブームともなるしろもののであるから。

そのころ、まだ軍人が全盛の時代であった。〇〇少将未亡人が研級室を訪れて、故人が秘藏していた岩石標本があるので、ぜひ寄贈したいと申しでてきた。折角の好意でもあり、とにかく、寄贈を受けてみることにした。

不日、その荷物がとどけられてきたので、好奇心も手伝いながら、コン包をほどいてみておどろ



菊石

いた。その大半が、一つ一つ立派な布に包んだ、おそらく苦心の収集になる、世にいわゆる、陰陽石などといわれる、大小さまじまな、石ころばかりであった。

^{かなめいし}要石神社に奉納された珍石 珍石については、もう一つ驚いたことがある。それは、今では沼津市に合併された駿東郡原町の、町史地質部門執筆のため、昭和第二放水路工事現場と、その付近の調査をす

すめていたときのことである。

第二放水路の西方、約 900 m の田子の浦砂丘（正確には、田子の浦砂丘のうちの、浮島砂丘の東田子の浦砂丘の原ブロック）上の国道 1 号線の南側に接して、要石神社という小祠^{しょうし}があり、地震に関する伝説を背景とした、「要石^{かなめいし}」というのがあるが、ご神体としてまつられていた。

余談にわたるが、この「要石」は、ほこらのま後ろにあって、石造りのさくの囲いの中に、長径約 50 cm・短径約 30 cm の、丸味を帯びた姿を、砂丘面から約 30 cm 下がった位置に現わしている。うす暗いジャングルまがいの、やぶのような林の中であって、はっきり観察することはできなかったが、玄武岩質岩のようである。口碑によれば、安政の大地震の際、「要石」だけは動かなかった、ということで、「要石」は愛鷹火山の熔岩流の末端と信じられて来ている。このことは、直ちにまた、浮島沼成因も結びついている。

「要石」に似た話は、日本の海岸砂丘地帯に、しばしば知られており、茨城県鹿島灘に面する、鹿島神社の石棒は、殊に有名である。これらのことは、砂丘上の構築物が、地震に対して比較的安定である事実と、関連性があるようである。なお、「要石」は、一応、根のないブロックと推定している。

「要石」のことはさておき、ほこらの前庭をみると、実に何千という珍石が積みしかれていた。それらは、ほぼ拳大の、各種岩質の、丸味を帯びた石ころで、どれもこれも、大小とりどりの、自然の穴が貫通していた。奉納した人たちは、この石一つをさがすのに、随分苦勞したことであろう。この現象は、耳の病に御りやくのある神前に、立願^{りゅうがん}のために供えた奉納品であって、信仰の力の一面を、不信心な筆者もナニ分に知らされたわけである。

信者達の、ひっしの願のこもったこれらの石の中には、ポーリング・シエルによってうがたれた、比較的やわらかい、シルトもいくつか交っていたが、人為的に穿孔^{せんこう}されたものは一つも見あたらなかった。

余談にわたるが、神社の御神体には、まれではあるが、地層現象が御本尊となつて、おさまっていることがある。岩手県の隕石^{いんせき}をはじめとして、四国の象の歯の化石や、天狗^{てんぐ}の爪、実はサメの歯の化石、（多くは、カルカロドン・メガロドン）などがそれである。

正 誤 表

ページ	行	誤	正
第 19 号 閑人閑語			
20 (2 図)		ヤングローブ地帯	マングローブ地帯
"	15	(矢部一長克……	(矢部長克………
"	20	などに生じていることが報告されている。 (重複)	(全文)を削除し、"されている。"を入れる。
第 20 号 閑人閑語			
41	12	ぬぐいに移して水を絞り、別の容器に入れて、洗濯ノリを少し多目に入れ、再びよくねり混ぜる。	(前文を削除) 重複
第 21 号 地学散歩(3)			
1	12	b) 円礫穴	b) 円鑿穴